

連載 11

世界最大の経済力を誇る最近のアメリカ社会のひずみがマスコミで報道されていますが、アメリカの学習困難児（低所得家庭児、発達障がい児等）に対する教育的支援や改革は、1965年に始まったヘッドスタート（Head Start）プログラムでは、宇宙開発予算に次ぐ巨大な投資が行われて来ました。世界のトップ頭脳が集まるといわれているハーバード大学の対極に、巨大な低学力層がある国ですが、ヘッドスタートプログラムも幼児教育に力を注いでいます。筆者がロサンゼルス郊外の小さな保育園を訪問したとき、幼児クラスの保育室のデザインに目を見張りました。マルチインテリジェンス（多重知能理論）ルームと呼ばれ、数台のパソコン、小さな図書館のような情報コーナ、おもちゃの棚には子どもの知的な意欲を注ぐ多様な教材、ワールドオリエンテーションとラベルのある棚には世界各国の地図や風習・生活・言語の情報が集められていました。知識は受け身で身につけるのではなくて、自ら積極的に開拓するアメリカの伝統的な教育法ですが、保育室の多様な情報と興味を与える工夫はグローバリゼーション社会を意識していることは確かです。